そうだ、お題で短編を書こう！

羽衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そうだ、お題で短編を書こう！

【Ｎコード】
Ｎ８６９４Ｗ

【作者名】
羽衣

【あらすじ】
１年３６５日のお題をかりて短編を書いていこうという無謀な挑戦。

01　無限増殖

「ねぇ、また増えてない？」

「・・・き」

「気のせいじゃないわよね？」

「・・・・」

「私、言ったよね？今度、増やしたら別れるって」

「・・・・」

「どうするの？こんなに増やして・・・」

「しかし・・・」

「『しかし』じゃないわよ、どうするの？」

「・・・だって、かわいそうじゃないか！！」

「だからって、こんなに増やしてどうするの！！」

「数があればきっと！！」

「数があっても無理なものは無理なのよ！！」

「そんなことはないはずだ！彼らにだってできる！！」

「その辺の冒険者にやられて終わりよ！！」

「な、なんてことを言うんだ！！」

「だってそうじゃない！！レベル１のスライムなんて！」

その言葉に色とりどりのスライムがぷよぷよ動いた。

02　あなたの誇りは何ですか

Q. あなたの誇りは何ですか？

俺のほこり～？てか、お前さんなんなんだい？えっ？取材？ん、名刺かい。おーありがとさん。へーあんた、大層なところに勤めてるんだな～あっわりぃわりぃ。っで誇りだっけね～そりゃ俺は大工だからこの腕だな。この腕でおまんま食ってんだからよ！そりゃあ、大変だったんだぜ～・・・・いや、いいってことよ。まぁ一人前になるには半端な覚悟じゃいけねえってことさぁ。

Q. あなたの誇りは何ですか？

いえいえ、どうぞおかけください。はい、お話は伺っております。私の誇りですよね。えぇ、まぁなんと言いますか、奔放な方でして。はい、そうなんです。えっあなた様もですか？お互いに苦労してますね・・・。そうですね、はい、そうなんですよね・・・えぇ、えぇ・・・・あっ、もうこんな時間に。いえ、いいんですよ。えぇ是非、またいらしゃってください。

Q. あなたの誇りは何ですか？

にゃーにゃにゃにゃ？にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃー、にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃー？にゃにゃにゃにゃにゃ？にゃにゃ、にゃにゃにゃ？にゃーにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃ

にゃにゃにゃにゃにゃにゃ・・・にゃにゃにゃにゃ、にゃにゃにゃにゃ、にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃー（にゃーんだにゃ？変にゃ質問するにゃー、誇りって食えるのかにゃー？違うって？じゃぁ、にゃんだ？んーお前の説明じゃ意味がわかんにゃいにゃ・・・おっと、そろそろ見回りの時間だからお別れにゃー）

・・・この馬鹿！！！お前はどこでなにを取材してきてるんだ！！えっ？あぁ大工まではいい、問題はそれ以降だ！取材をしに行って執事に気を使われてどうする？！だいたい、猫に取材するやつがいるか？！えっここにいるって？！この・・・馬鹿者ー！！！！

あなたの誇りは何ですか？

03　帰る家

「ただいまー」

私は誰もいない部屋に向かっていつものように声をかける。
数十年間続けてきた習慣は数週間で消えるものではない。今まで一緒に暮らしてきた祖母が亡くなり、悲しみにくれる間もなく日々はながれる。生きている限り、人は働かなくてはならない。
当面は、祖母が残してくれたわずかな財産でどうにかなるが、あまり使いたくない。
なにがあるかわからないし、その財産は祖母の気持ちだ。

私には両親がいない。
なぜ、いないのか祖母に聞いたがよくわからなった。ただ、時がくれば迎えがくると言っていたので死んでいるのではないかと思っている。
そう、思っているのだ。なぜなら、私が両親は死んだのかと尋ねても祖母は柔らかく笑うだったから。

「・・・こんなものか・・・」

少しずつ、祖母の荷物を片付けていく。使う主を失った道具たちは少し寂しそうだ。
私は病床の祖母から託された指輪をゆっくりなでる。そうすると、不思議と心が落ち着くのだ。荷物を片付けていて寂しくなったみたいだ。
ここ数週間はいろいろとやることがあったのでなんとか乗り切れたが明日からは落ち着くのでどうなるかわからない。
私は孤独を酷く恐れている。とても恐いのだ。考えようとしなかっ

たが私は今、独りなのだ。

「恐いよ、おばあちゃん・・・」

指輪を握り締める。

その時、唐突に視界が開けた。

「・・・え？」

家にいたはずなのに、私が今いる場所はどこかのホテルの一室みたいな部屋だ。

いや、ホテルの部屋とは決定的に違う点がある。

「おかえりなさい、姫」

物語の中でしか見たことのないようなかっこいい人が立っていたのだ。

03　帰る家（後書き）

召還されましたー。

０４　逃げられない、逃がさない

「今日こそ逃がさないわよ！！」

「いや、逃げる！」

「っちょ、待ちなさーい！」

「待ってと言って待つバカがどこにいるー！！」

「卑怯者ー！！！」

いつもと同じ光景に友人たちは呆れた顔を向ける。

「なんだかんだで仲いいよね、あの二人」

「まぁ毎回追いかけっこしてるもんねー」

「決着なんてつかないのにねー」

「よく飽きないよね・・・」

「確かに・・・」

「何気に楽しんでいるからかしら？」

「それもあると思うけどやっぱり・・・」

「やっぱり？」

「追いかけられると逃げたくなるからじゃない？」

「・・・それって」

「さて、実際に逃げているのはどっちでしょう？」

05　カーテンの向こう側

「うーん、なぜだろう？」

目の前に広がる景色を見ながらここ数日の記憶を掘り起こし、なんでこんなことになったのか考えみる。

＊＊＊＊＊＊

「・・・ごめん、他に好きな人ができたから別れて」

高校から付き合っている彼女に突然振られた。指輪を用意してプロポーズする直前だった。

「えーっと」

頭が混乱する。
この間まで海外での挙式とかいいね～、指輪はやっぱり誕生石がいいわ～って・・・。

「他に好きな人が出来たの・・・あなたのことは好きだけどその人みたいに愛せないわ。」

そう言って彼女は去って行った。
正直言って次の日からの記憶はあまりない。
とりあえず、会社に行って仕事をこなし、夜は夜で、お酒で気をまぎらす毎日を送っていたと思う。
そして、いつも通りの朝を迎えるはずだった。

「それがなんでこうなったんだ・・・。」

いつものようにカーテンを開けたらそこには見たことのない景色が広がっていた。

06　スキャンダル

国は荒れた。

王の後継者たちによって。

兄弟、親族、親と子が互いに殺し合う悲惨な状況だった。

互いが互いに王を名乗り、平和だった王国は数日後にはすべての国土に血が降り注いだ。ありという町と町、村々の男たちは次々徴兵されていき、残された女たちは途方にくれた。やがて男手がなくなり、田畑は次々荒れ、遂にはまだ幼い子まで国に連れて行かれた。食べるものがなくなり互いが敵になっていく。

皆、生きることに必死だった。

＊＊＊＊＊

「マリー、僕は戦争を止めてくるよ」

「は？あんた、なにいってるの？！」

私は幼なじみの突然言葉に驚いた。

はっきりいってなに言っているか理解ができない。

私たちの国は王位をめぐって戦争をしている。

もう、何年も続いるが、一人また一人と後継者が減っていて、その

うち誰もいなくなるんじゃないかと私は思っている。
誰もいなくなったら次は、漁夫の利のごとく隣の国に吸収されて終わりだろうと私はふんでる。
まぁその際にまた、戦争になるはずだけど。（へんちくりんの貴族に限って生き残りそうだし～）
そんな国の状況が嫌になるのは解るけど、いきなり戦争を止めてくる発言は訳が解らない。

「だから、戦争を止めるんだよ、マリー」

「だーかーらー、意味が解らないって！！」

「僕は王になる」

「はぁ！？」

常々、変な幼なじみだと思っていたが遂に脳みそにお花畑でもできたか？
思わず、頭をジーッと見てしまった。

「・・・えっと、マリー聞いてる？」

「あんたの頭、蝶々でも飛んでるんじゃない？」

「飛んでないから・・・」

「じゃあ、なんでいきなり王になるなのよ？

平民なんて兵士に無理矢理なって死んで終わりよ。
運良く戻ってきても直ぐに別の戦場に連れて行かれちゃうんだから！」

「マリー、僕の父親は第一王子だったんだ」

「はぁ！？第一王子！？」

第一王子って早々に死んじゃった人じゃないの！
確か、一番まともだったから、次男の母親の妃に王位継承前に毒殺されちゃった人！
（まぁそのあとに妃は息子の次男に殺されちゃうんだけどね）
その毒殺を皮切りに継承者が次々、殺し合いをはじめて戦争に発展するのよね～
って・・・そんな人が父親？！

「・・・そうだよ、今までは力がなくて戦うことが出来なかったけど協力者を見つけたんだ」

「だからってあんた騙されてるわよ！！」

私は力一杯叫んだわ！
だって今まで見つからなかった協力者が今、見つかるなんて怪しさ満点じゃない！

「マリー、僕は王族だ」

「今は平民よ！」

「だけど、王族の血が流れているんだ。
なんで、父親が僕だけを逃がしたかはわからないけど、この戦争を終わらせる義務がある」

義務って・・・確かに戦争が終わってくれることは望んでいる。
けれど、そのために大切な幼なじみを生け贄にはさせないわ！
私は目まぐるしく計算を始める。

「・・・マリー、今度会ったら君に聞いてほしいことがあ・・・」

「そうだ！！」

「るん・・」

「決めたわ、私も一緒に行く！あんただけじゃ心配だもの！」

そうよ、一緒に行けば心配も激減するし、余計な虫（女）が付かないようにも見張れるから一石二鳥だわ！

「マ、マ、マリ～！！あ、危ないんだよ！！」

「なによ。なんか文句があるわけ？言っておくけど、私、あんたより強いわよ！！」

すると、幼馴染が少し青ざめた顔でうなずいた。
ギルドランク最年少ＳＳＳ（トリプルエス）の私に勝とうなんて５００万年早いのよ！！

＊＊＊＊＊＊

後の歴史は語る。英雄王アレックの始まりを・・・。
戦争を憂いて戦いを終わらせるために戦い、
国民に過ごしやすい国を造ることに生涯を捧げたよき王だと。
そして、そのことから英雄王と呼ばれるようになったと。
その傍らに常に妻マリーがいたことを。

だから、英雄王の名誉のため、英雄と呼ばれる所以が妻の策略、妻のほうが英雄王より強かったことは、けして知られてはいけない王家の秘密である。

06　スキャンダル（後書き）

遅くなりました・・・―（Д゜）コソーリ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8694w/

そうだ、お題で短編を書こう！

2011年11月26日18時46分発行